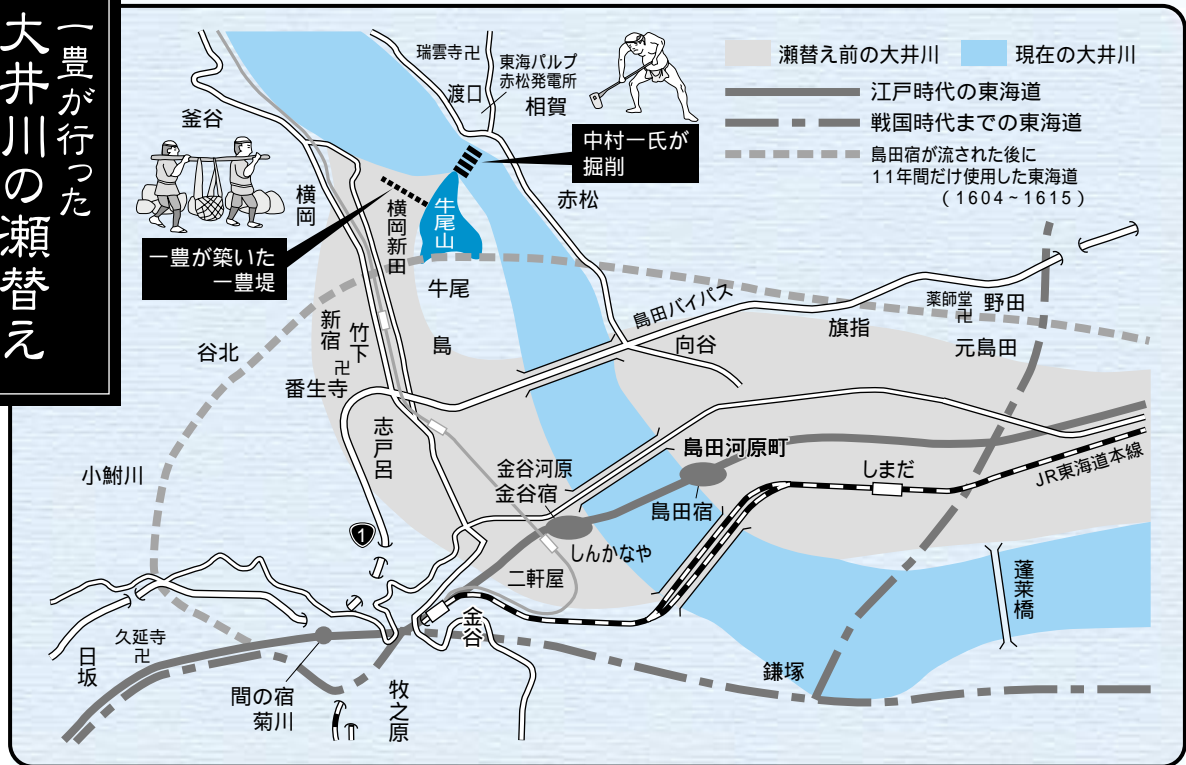


織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた戦国武将

# 一豊と掛川

その4

一豊が行った  
大井川の瀬替え



## 国土開発にも努めた一豊

一豊は、在城の10年間、国造りの一環として大きな土木工事を行っています。秀吉から命じられ、1,200人の軍兵を引き連れて、伏見城の石垣の普請と門の作事を行いました。また掛川城では、外堀と内堀で城下町を取り囲む「総掘り」の土木工事を行っています。そのほかにも、後世に残る大きな工事として、新田開発と洪水防止に努めた大井川の土木工事があります。

## 金谷宿と島田宿へ影響を与えた天正の瀬替え

室町時代から戦国時代まで、大井川の流れは横岡あたりで、牛尾山にぶつかり、西へ向きを変え新宿、志戸呂を経て二軒屋の崖にあたり、東に流れを変え対岸の旗指・野田方面へ流れ、大雨の際は大洪水を起していました。この大きな川の扇状地の要で流れを変えたのです。駿河城主の中村一氏が牛尾山と相賀の間、約144間(約260m)の掘削を行い、流れを直進させました。一豊は、それまでの流れの牛尾山と横岡の間に、約80間(約145m)の堤を築き、その後旧河川の跡が開

墾され、新たに「竹下、牛尾、島、番生寺、横岡新田」の五和村が誕生しました。五和村は山内領とされ、この堤は現在も地元の人達に、一豊堤(横岡堤)と呼ばれ、石碑が建てられ大切にされています。

この河道の変更は、金谷宿・島田宿の形成に大きな影響を与えました。戦国時代までの東海道は、牧之原台地から二軒屋、鎌塚を通り元島田へ渡るルートが主流でしたが、本流が東へ移ったことにより、流れは鎌塚を直撃するようになり、渡渉箇所としては不適當になりました。一方、金谷宿では旧河道の開発が進み、日坂から間の宿菊川を経て金谷へ至り、金谷河原から大井川を渡り島田河原町へのルートが確立され、近世東海道の川越しの金谷宿・島田宿として発展します。



一豊堤(横岡堤)正面が牛尾山  
島田市横岡新田に建つ石碑 (監修:掛川市郷土研究会連絡協議会)